

ひょうごの遺跡

兵庫県埋蔵文化財情報

50号

平成16年1月30日発行

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032

神戸市兵庫区荒田町2-1-5

TEL 078 (531) 7011/FAX 078 (531) 7014

ホームページアドレス

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

中世物語

～古代から中世。そして、近世へ～

日本の中世は、武士が主役となった時代です。兵庫県には清和源氏発祥の地や、山名氏・赤松氏関係など数多くの城館・荘園遺跡が残されています。

さらに、当事務所は^{おおわたのとり}大輪田泊を望む^{ふくはらきょう}「福原京」の伝承地に所在し、今年がこの地に移転して20周年にもあたることから、本号を中世遺跡（秋から冬の調査速報を兼ねた）の特集といたします。

その1

楠・荒田町遺跡（神戸市中央区楠町～兵庫区荒田町）

平安時代末の遺構は、福原京に関する平氏一門の屋敷跡と考えられます。二重壕と櫓と想定される建物跡が見つかりました。

その2

和田村四合谷村ノ口付城跡（三木市志染町吉田）

天正6年（1578）、羽柴秀吉が三木城を攻めるにあたって約30箇所に造った付城の一つが、南北朝時代の城跡を再利用したものと分かりました。

その3

場市遺跡（養父郡養父町建屋）

建屋うすぎ城の山麓に広がる室町時代前半の遺跡です。今回の調査では、建物跡と池を中心とする庭園跡が見つかりました。



楠・荒田町遺跡（平野町側から神戸港への眺望）

その1

楠・荒田町遺跡

清盛の摂津国福原山荘・まぼろしの都「福原京」跡か

兵庫県教育委員会では、神戸大学医学部附属病院の整備に伴い昭和60年から発掘調査を行ってきました。今年度は駐車場の整備が計画されたため、工事の進捗にあわせて、8月（北地区）と10月（南地区）の2回に分け発掘調査を実施しています。

外敵に備えた櫓跡

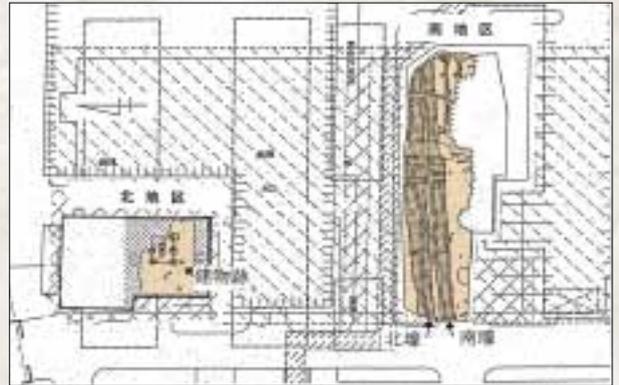
北地区の調査では、古墳時代と平安時代末の遺構が見つかりました。その中で、注目されるのが平安時代末の遺構です。

この時代の遺構には、建物跡と土坑^{どこう}があります。建物跡は東西2間（3.6m・柱間1.8m）・南北1間（2.7m）の規模で、柱を立てるために一辺約1mの方形の穴が掘られていました。

穴の底には加工した石を再利用したとみられる平らな石（礎盤石^{そばんせき}）が据えられ、その上に柱が立てられていたようです。使用された柱は、穴の中に残る痕跡から、直径が30cm以上の太さがある丸い柱であったようです。

建物は古代末から中世にかけての貴族や武士の館に見られるような、「櫓」に相当するものと考えられます。

土坑は土器を捨てるために掘られたもので、土師器の皿や中国から輸入された磁器の皿などがありました。儀式などに使用した後、廃棄されたのでしょう。



▲調査区位置図



▲柱穴内の礎盤石



▲土器が捨てられた土坑



▲北地区の建物跡

二重に造られた壕

南地区では二本の壕と溝、柱穴などが見つかりました。二本の壕は北地区の建物跡から30mほど南に位置し、約0.5mの間隔で並行して、調査区内を東西に約39mにわたって直線的に延びています。現在の地割りから、西側がわずかに南に下がる（N70° E）方向です。

北側の壕（SD1）は上幅が約2.7m、深さは約1.7m、葉研壕と呼ばれる断面がV字形をしています。埋土の中層には、直径40cm程の石や炭が含まれており、一部にはその下層から完形の土師器の皿がまともに出てきました。一時にまとめて捨てられたものでしょう。この壕からは他に青磁の碗や皿、白磁の碗、青白磁の碗、須恵器の鉢や甕、瓦器の碗や皿なども出土しました。

南側の壕（SD2）は、上幅約1.8m、深さ約1.6m、断面はU字形をした箱壕と呼ばれる形です。この壕からも同じ時期の土器は出土しますが、SD1のような完形品は全く出土しませんでした。



▲直線に延びる二重の壕



▲南壕の断面



▲北壕の断面

平氏一門の足跡

北地区の土坑や南地区の壕から出土した土器は、概ね12世紀後半の年代を示しています。また、土師器の大半が京都系といわれる製作技法で作られ、京都に関係の深い人々が生活していたことが看取できます。土師器の一括投棄は饗宴（年中行事・儀式）で使用したものを捨てた跡で、平安時代上流階級の貴族の存在を示すものです。

また、二重壕は屋敷地を区画する溝とされますが、一般の平安時代の屋敷に伴う溝や、過去の大学病院内で検出した溝に比べると非常に規模が大きく、単に屋敷地を区画する以上の意味を持つものと思われます。

壕に囲まれ櫓と思われる建物を備えた屋敷は、まさに「福原京」の時代のものであり、出土した土器から京都に関係の深い上流階級の人物の邸宅であると考えられます。文献では、平頼盛の邸宅が「あした（荒田）」にあったことが記載されています。頼盛は平清盛の異母弟で、福原遷都時、邸宅は安徳天皇の御座所になり、後には高倉上皇の御座所となったことでも知られています。

その2

和田村四合谷村ノ口付城跡

つけじろ

中世戦乱期の大規模な城跡

和田村四合谷村ノ口付城跡は、秀吉が三木城攻め（1578年～1580年）の際に築いた城のひとつと考えられてきました。この付城跡に県道三木三田線（志染バイパス）整備事業が計画されることとなり、調査を行ったところ、南北朝時代の城を改変して造られたことが明らかになりました。



累々たる土塁・巨大な堀切

この付城跡は城の中心である平坦な部分（主郭）を土塁や壕（空堀・横堀・堀切）などの非常に大がかりな施設によって守っていたことが特徴です。

土塁・空堀

西側（三木城側）は五重の土塁と四重の壕により堅牢な守りになっています。三木城攻めの時に改変されたと考えられます。



堀切

東側（丹生山側）の巨大な堀切は、南北朝時代の堀切としては類を見ない大きさです。



さまざまな営み

主郭内では立派な建物は見つかりませんが、南北朝時代にはこの城跡がかなり継続的に使用されたことを示す、大量の土師器皿・鉄製品をはじめとする様々

な遺物が出土しています。この城の中での多様な生活を垣間見ることができます。



アカニシの貝殻
宴会のごちそうでしょうか。



こざね よろい
小札（鎧の部品）
当時の戦いを偲ばせます。



かじろ
鍛冶炉
鉄製品も作られていました。

駆けめぐる人々

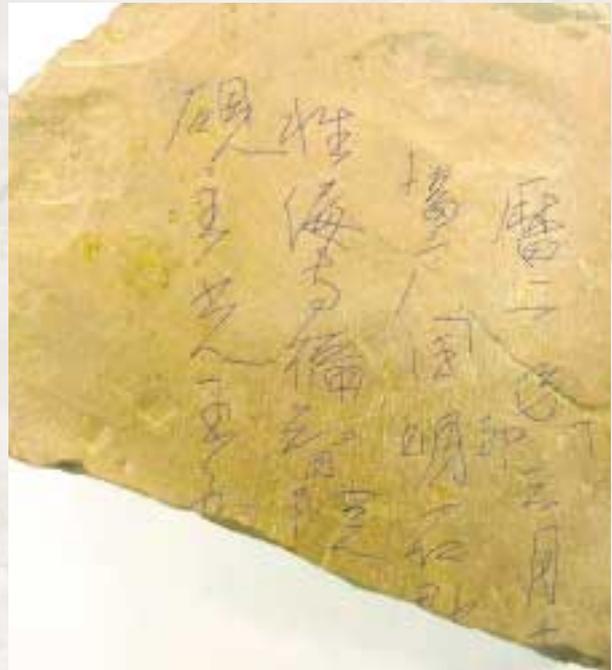
今回見つかった城跡は、大きく2時期に分かれます。秀吉の三木城攻めに関わることはこれまでも知られていましたが、南北朝時代からすでに城が築かれていたことは予想していませんでした。主郭の周りを取り囲む横堀や巨大な堀切などの大規模な防御施設は、この時期の城のなかでもほとんど類例のないものです。このようなものを誰が造ったのかもよく分かりません。

文献資料によると暦応^{りやくおつ}2年（1339）に赤松氏を中心とする北朝方が南朝方の拠点である丹生寺城（神戸市北区）を攻略するために「志染軍陣」に集結し、周辺の城郭を攻めたことが分かっています。この遺跡を理解するための、手がかりになると考えています。

また、堀切から出土した硯の裏面には嘉暦^{すずり}二年（1327）の年号と、持主の住所・名前が書かれていました。

持主は、神戸市西区に所在する性海寺福智院のお坊さんだったようです。

この遺跡は、赤松円心^{えんしん}・則祐父子や羽柴秀吉などの中世の戦乱期を駆け抜けた人々が活躍した舞台だったのでしょう。



硯の裏面に陰刻された 暦二年銘
（銘文部分に加墨）

その3 場市遺跡

但馬太田垣氏の庭園跡か

場市遺跡は建屋うすぎ城の山裾一帯に広がる遺跡で、市場が転化した地名と考えられています。昭和50年代のほ場整備事業によって確認され、今回は県道養父朝来線改良工事（建屋バイパス）に伴って、野脇遺跡・広瀬遺跡とともに発掘調査を実施しています。

建屋うすぎ城は、建屋集落の西側の丘陵上に築かれた城で、国史跡竹田城を築いた太田垣氏の居城と考えられています。大屋川の支流（建屋川上流）に位置するこの地域は但馬と播磨を結ぶ間道沿にあたり、山名氏と赤松氏が攻防した境界部分に相当する軍事的に重要な地域です。遺跡の一段高い部分には殿屋敷・ピク二畑の小字名も残っており、居館跡や別邸が存在していたようです。

池・洲浜・遺水・滝の庭園

調査では、室町時代前半（14世紀から15世紀）の屋敷跡が見つかりました。建物と池を中心とする庭園跡、そして城から延びていると考えられる道路跡です。

建物跡は、池を取巻くかのように三方向で発見しました。北側に礎石建物、西側と南側には掘立柱建物があります。礎石建物は、2間×2間の1辺4mの正方形の大きさです。生活面に礎石を置き、その上に柱を組み屋根を葺いた建物です。

池は、調査している範囲での最大長が30mを超える立派なものです。室町時代は枯山水の庭園が多いのですが、場市遺跡の池は水を巧みに利用したようです。三尊石や滝に見立てる大型の石材を配す構造を採り、

園池に水を導く水路が発見されたことから明らかです。池・洲浜・遺水・滝と、庭の作り方を熟知した人が作ったものと思われます。

また、この池は年代により三段階に大きさを変えています。14世紀の当初のものから15世紀には縮小し、15世紀の中でさらに小型化しているのです。

古段階の池は卵形の平面形をしており、浅く皿状になっています。池の西側には洲浜から続く平坦な石組があり、主屋はこの石組のいずれかを礎石として利用し、建っていたものと考えています。中段階には、北側半分を埋めて生活空間を広げています。埋め立ては直線的で古段階の池を半分にした状態です。埋土の中には各地



調査風景



調査区全景

の土器とともに、鉄滓・羽口・鉄器が多く入っており、鉄器生産を行っていたことも明らかになっています。なお、中段階と新段階の時期差はあまりないようです。

道路跡は平常時の居住部分（殿屋敷の字名のところ

に推定されています）から庭園に続いているもので、幅1.5mを測り、直線でなく地形に即した弧状になっています。

かわいいウサギの水滴^{すいてき}

出土遺物には、中国から輸入された焼物（青磁・青白磁・白磁・染付^{そめつけ}）、日本国内から運ばれた焼物（瀬戸美濃・備前・東播系）、そして地元で作られた土器（皿が多い）があります。

さらに、鉄製品（釘・刀子）、青銅製品（水滴）があります。

但馬の地にこうした日本各地の焼物が出土することは、活発な交流があった結果と想像されます。また、青銅製のウサギの水滴は出土例の知られていない珍しい遺物です。



青銅製のウサギの水滴

中世南但馬の雄、太田垣氏の文化的環境

調査成果は、建屋うすぎ城関連の京文化を楽しんだ庭園跡の発見です。但馬には名勝として残されてきた庭園（日高町・大岡寺）がありますが、発掘調査で確認されたのは初めての事です。

さらに、場市遺跡は発見した庭園遺構だけでなく、調査範囲外には城跡と居館跡・墓が一体となって残るなど、中世に武士が台頭していく状況を示す重要な遺跡です。太田垣氏、そして但馬の中世を考える上で誠に興味深い遺跡なのです。



水を溜めた池跡



地域文化財展
2003

邪馬台国への道のり

開催報告
II

地域文化財講座

9月末から10月にかけての日曜日の午後、姫路市にある県立歴史博物館講堂において、当事務所の職員による連続講座を実施しました。この講座は、今年度新たに地域文化財展のイベントとして行ったものです。

当日のテーマは、国家形成期（弥生時代後期から古墳時

代前期）の西播磨を中心に、1 弥生集落遺跡、2 青銅器生産と祭祀、3 弥生時代の墳墓、4 前方後円墳と三角縁神獣鏡のお話でした。やさしい解説は、シンポジウムや展示の内容を理解していただくために役立ったでしょうか。

シンポジウム

地域文化財展のまとめとなるシンポジウムは、11月15日（土）に実施しました。

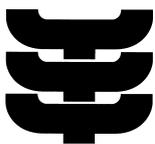
第1部は新宮町史編集専門員の松本正信氏による「新宮宮内遺跡と西播磨の弥生時代」で幕を開けました。続いて、文化庁記念物課の禰宜田佳男氏には「石器から鉄器へ（倭国大乱）」の講演。昼休みを挟んで、龍野市教育委員会の岸本道昭氏に「弥生墳墓から古墳へ」、大阪大学の福永伸哉氏には「銅鐸から銅鏡へ」という演題で講演をいただきました。

その中で、特に禰宜田・福永両氏は物流システムにおける瀬戸内ルートと日本海に抜けるルートをもとに、播磨地域と畿内政権の関係を重要視されています。

第2部はコーディネーターに大手前大学の榎本誠一氏、パネリストとして前記の4名の講演者、さらに新宮町長の梅村忠男氏と新宮町立図書館長の大西和美氏を迎え、討論を進めました。

「石器から鉄器へ・弥生墳墓から古墳へ・銅鐸から銅鏡へ」と「新宮宮内遺跡の整備と活用」のテーマに合わせ、聴衆の方々からいただいた質問を交えて、邪馬台国時代の播磨をめぐる内容豊かな討議であったと思います。また、新宮宮内遺跡の活用に向けて、新たな取り組みも始まりそうです。参加者は約350名でした。

なお、平成16年度は神戸地区での開催を予定しています。ご期待ください。



文化財愛護シンボルマーク

15教②-026A4



（愛称：ココロン）
"こころ豊かな美しい兵庫"をめざして

編
集
後
記

考古学が明らかにした新しい中世像を、感じとっていただけたいでしょうか！
『ひょうごの遺跡』も50号となりました。その間、長期休刊や阪神淡路大震災等々、いろいろな出来事がありました。他府県と同様に職員の高齢化も進んでいますが、発掘調査や整理調査、そして県立考古博物館（仮称）の先行ソフト事業に日夜頑張っています。引き続き、ご支援・ご愛読よろしくお願いたします。（S.O）